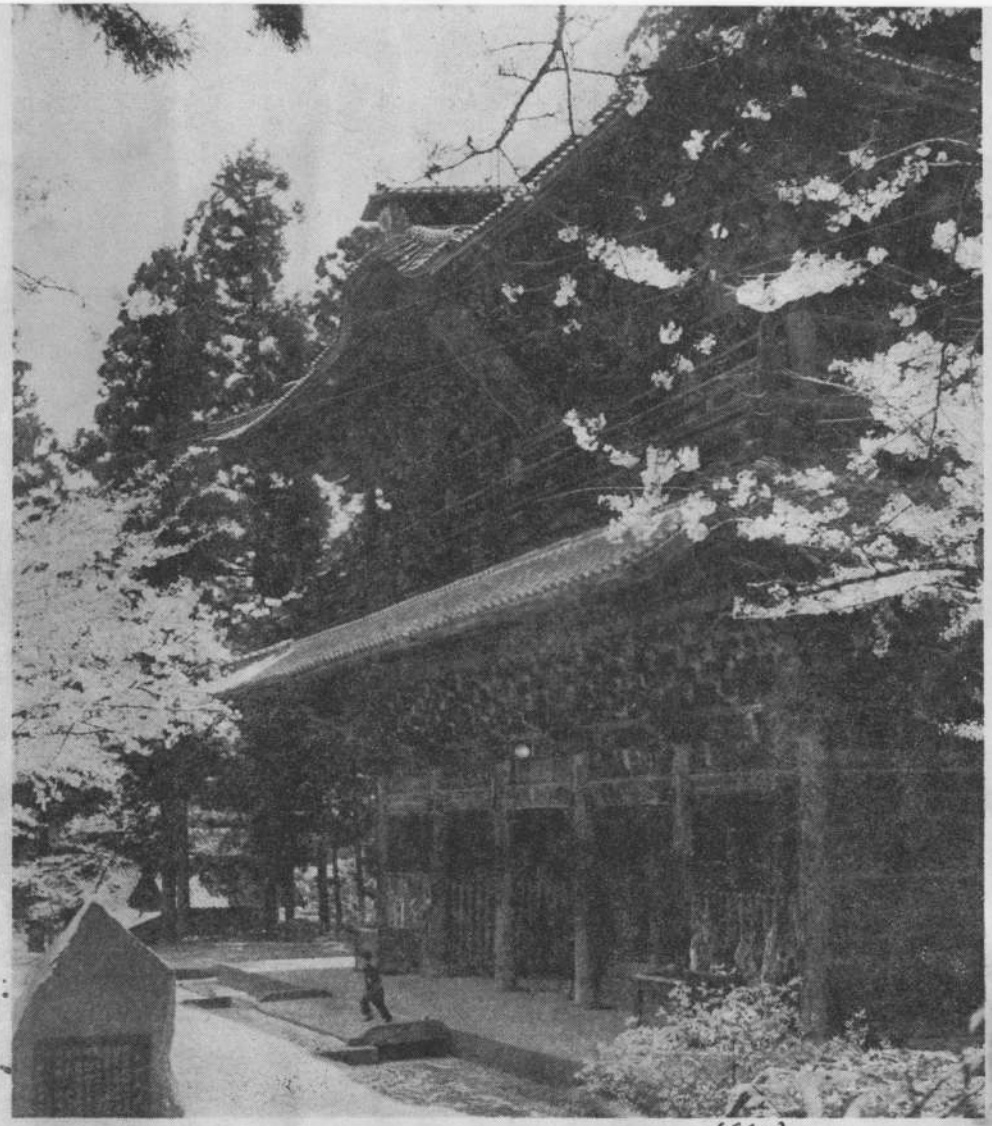


小室山三門

(540)
1965. 9.
マンクラ夏季合宿所
小林.小泉.工田.後谷.田村.中之.内山.

甲州小室山縁起

小室山庫裡の一部

当山『秘妙符』

当山の開山である日伝上人（縁起をお読み下さい）が、大聖人から直々に相伝を授けられた秘妙符は小室山の代々の貫主に伝えられて、今日に至るまで「小室の毒消し秘妙符」として多くの人々がその霊験を受けています。霊妙の効験が非常に顕著で、信心を凝らしていたゞく人は、必ず病気が癒ります。今日、小室山の一切経蔵のうしろに御符水の井があります。これは天竺の阿耨達池の水と底が通じていると言われ、何んな時でも濁ることがありません。当山の切紙相承の毒消御符は、この井戸の水を汲んで、貫主様みずからが相伝に則って認めるものであります。

開山日伝上人が奉安していた「日恵善神」は、昔から霊験が高いといわれていましたが、天正五年三月に世間に悪い皮膚病が流行したときに、御霊夢に托して、「吾を信ずるものは必ず病を癒さん」とおおせになり、霊薬の秘法をお授けになりました。いまでも小室山の「あか膏」といって大変効験があると評判になっています。

また、当山の三十四世、日儁上人（文化元年七月二十六日寂）は徳望一世に名高く、頭痛守護と称ばれました。今日でも当山では上人から相伝した御符を人々にお頒けしています。

甲州小室山縁起

当山は、人皇四十一代持統天皇の第七年(A.D.688)今から数えて千二百七十四年前に、能く鬼神を駆使って名高い役の行者が創められたもので、東三十三ケ国の山伏の棟梁として、古くから大変名高い名刹でありました。

文永十一年(A.D.1274)、日蓮大聖人は身延山にお入りになりましたが、ふと、小室山のことをお聞きになり、身延山から僅か五、六里しか離れていない此の小室山に、真言の大刹があって、誤まった真言の教えを弘めていることは、誠に遺憾のことだ。まず、この大刹の御住職を導いて甲斐の国を法華経弘通の地としなければいけない。そうお考えになりましたので、大聖人はその年の五月二十八日に日朗、日興の二人を御伴として、この小室山に向われました。そのとき、大聖人は御年五十三才。五月雨も晴れ、青葉に、薫る風も心地よく当山に足を運ばれましたが、ふと田の面を御覧になると、苗を植える乙女の足に、蛭が数多く喰入っております。たとえ蛭でも一匹の虫である限り、之を殺せば殺生の罪となる。以後は殺生の罪から免れさせて上げる故、蛭を一匹持っておいで、そう言われて乙女達は悦んで蛭を大聖人の前に差出しました。大聖人は、御手に蛭を取って、声高く法華経をお誦みになり、お加持をされますと、忽ち、人に取りつく蛭は無くなってしまったということです。世に「土禄蛭」というのは、この因縁です。

村の人々は、この不思議に驚いて、われもわれもと大聖人のお側に集まりました。お祖師様はこれらの村人を前にして念仏無間、禅天魔、真言亡国、律国賊、と四箇の格言を述べて、熱心に説法されました。怒ったのは時の小室山の住職である恵頂阿闍梨・善智法印です。何処の何ものとも知れない坊主が、この天下に名高い小室山の巨利の前で、四箇の格言の説法をするとは、身の程を知らぬ横着者であると考えましたので、威かして追いかえそうと、頭巾、鈴懸、ましら袈裟、いらたか数珠を手に把み、金剛杖と鉞とを左右の侍者に持たせ、法螺貝を高く吹き立て、山伏数十人を従え、傲然として大聖人の前に現われ、「貴様は何処から来た旅僧か」と問い掛けました。

大聖人は静かに「私は安房の国、小湊の生れで、日蓮という者である。日本中に法華経を弘めて、一切衆生を救おうとするものであるが、そういうお前は誰だ」と言われました。法師は益々怒って、「おれは東三十三ケ国の山伏の棟梁で恵頂阿闍梨・善智法印という者だ。若い頃から真言三部の大灌頂を修行して来た大修験者だ。だまって聞いていれば、おれの宗旨である真言宗を亡国だ、などとほざいているが、不都合な奴だ」といって、いろいろに質問攻めにして大聖人を言い負かそうとしましたが、大聖人の筋道立った正しい弁舌にはかないません。

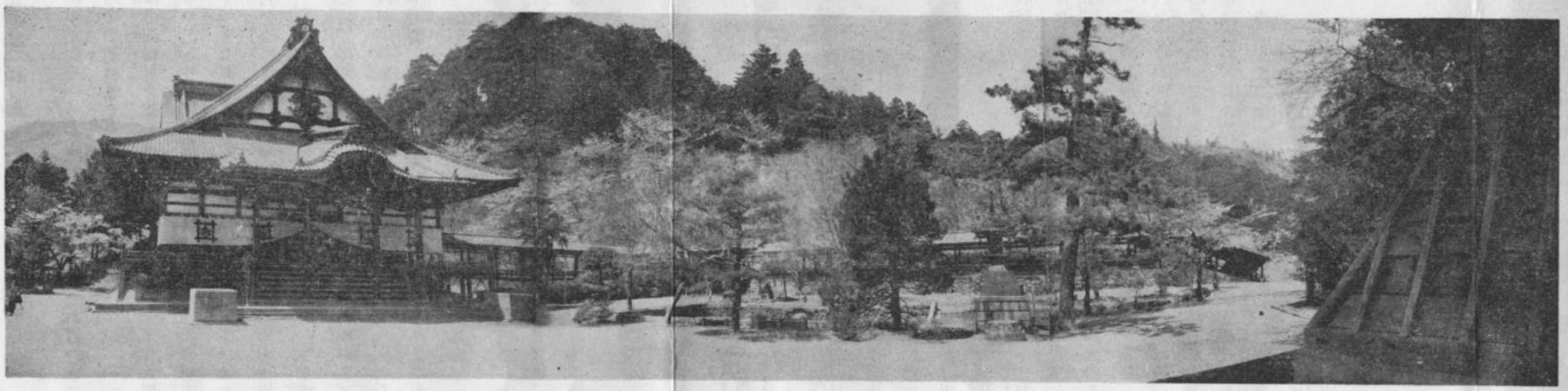
そこで法師は「お前は弁舌にまかせて俺を言い込めようとするが、俺の方には真言の修法がある。俺の行力を見よ!」と言うやいなや、丁度、大聖人が悠然として坐っていた一丈余りもある大石に向って、いらたか珠数を摺り立て摺り立て、声を限りに般若心経を読み上げると、不思議や、その大石は、虚空に一丈余りも昇りました。

村中の人々も、また数十人の山伏達も、「あっ!」と声を挙げて善智法印の行力に驚き合いましたが、日蓮大聖人は少しも騒ぎ給うことなく、御声しずかに、法華経の肝文を唱え、見宝塔品を御読みになって、更にお題目をお唱えになり、「お前が法力によって上げた石を私は今虚空に縛り留めたが、お前の法力でもとのように下して見なさい」と仰せになりました。「わけはないことだ」と法印は汗を流して祈禱しましたが、大石は虚空に留まってビクとも動きません。さすがの法印も自分が敗れたことに呆然とし、大勢の見物人も、度重なる不思議に、ただ、あれよあれよと言うばかりです。

大聖人は、そこで再び、不染世間法、如蓮華在水の経文を読み、九字を切りますと、大石は静かにもとの様に地上に降りて、旧の処に納まりました。善智法印は、今は手も足を出ず、始めて大聖人に対して、心の中から恐れおののき、その場にひれ伏して、大聖人を三拝九拝し、何卒この後は、御弟子の中に加えて下さい。と懇請して、小室山に御案内申上げました。

大聖人は一週間ほど御逗留遊ばされ、安国論の御説法をし、身延に帰られました。これから後、甲斐の国には段々と法華経が弘まり初めたのです。

を左右の侍者に持たせ、法螺貝を高く吹き立て、山伏数十



大　堂　山　室　小

足を出ず、始めて大聖人に対して、心の中から恐れおののき、その場にひれ伏して、大聖人を三拝九拝し、何卒この後は、御弟子の中に加えて下さい。と懇請して、小室山に御案内申上げました。

大聖人は一週間ほど御逗留遊ばされ、安国論の御説法をし、身延に帰られました。これから後、甲斐の国には段々と法華経が弘まり初めたのです。

このようにして、善智法印は一度は大聖人の御弟子になりましたが、もともと山伏の棟梁であったものが、何のこともなく負かされてしまったのですから、心の中では面白くありません。また大勢の弟子達に合わせる顔もありません。勿論、多くの弟子の中には傍から嫉てるものもあったことでしょう。特に、奥方のあさがお姫の出過ぎた口添えもありました。法印は苦しみました。そして夏も過ぎ秋風のそよぐ頃、法印は身延の御庵室に大聖人を訪ね、持参した粟餅を差上げました。大聖人は法印の心の奥まで見通して居られましたが、御礼の御言葉も穏やかに受取られました。が、丁度、偶然様先きに遊んでいた白犬に、その一つを投げ与えました。勿論、白犬は嬉んでその粟餅を食べました。その途端に、白犬は一声吠えて地に倒れ、四肢を震わせて死んでしまいました。粟餅には毒が入っていたのです。

大聖人は毒餅を食べて死んだ白犬を静かに御覧になり、「法華経の行者が自分に代って死んだのである。寿命が尽きて死んだのではない故、蘇らせて上げよう」と仰せになり、毒消しの秘妙符を御認めになり、軒の流れを汲んで秘妙符とともに犬の口に注ぎ込みますと白犬は見る間に息を吹き返しました。

善智法印は、顔色もたちまち青ざめ、血を吐く思いで大聖人の御膝下にうずくまり、懺悔致しました。大聖人は広いお心の持主です。直ちに筆をとって一首の和歌を認め、法印にお授けになりました。

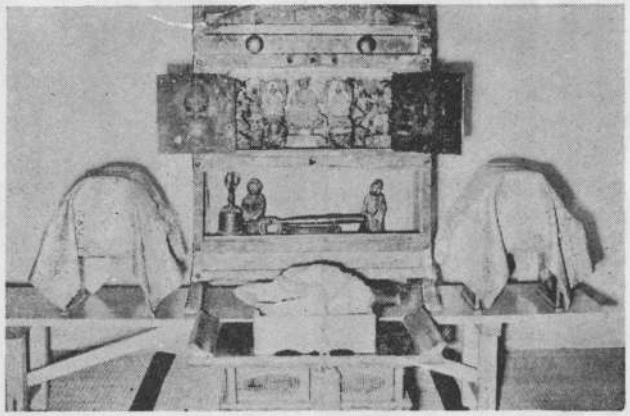
おのずから　よこしまに降る雨はあらじ
風こそ夜半の窓をうつらめ

法印は、その後は立派なお弟子様として過されました。大聖人から秘妙符の相伝を授かり、従来の小室山を全く法華経に改宗して大聖人から直々に徳栄山妙法寺の寺号を賜わり、また御真筆の大曼荼羅まで頂戴しました。後に肥前阿闍梨日伝として中老僧十二人の一人に加えられている方が、この法印です。殊に大聖人の御在世中はいつも身延に居て、御草庵の掃きそうじから、食事のお世話まで、到れり尽せりの御奉公を申上げました。今の身延の醍醐谷の志摩坊は、日伝上人が居られた遺趾です。日伝上人は当山の開山として在住六十一年、建武二年二月十二日に、静かにその生涯を終られました。

当山に祕蔵される霊宝

当山には、いろいろの霊宝が大切に秘蔵されています。「縁起」のところで申述べました恵頂阿闍梨・善智法印が、いつも使っていた負櫃や法螺貝を初めとして、後に法印が立派な大聖人の御弟子様になったときに、大聖人から直々に賜わった御真筆の大曼荼羅があり、また御消息文の断片も残っております。また、法印が日伝と名を改めて後、身延に居られる大聖人に御奉仕申上げている間に、霊験によって山の中から一本の珍らしい木を感得され、同じ中老僧で彫刻の名人でもある日法上人にお頼みして、その木で大聖人の御尊像を御彫刻申上げました。大聖人も大変喜ばれて御自ら御開眼して下さり、「私に会いたいならば、この木像を拝みなさい」とまで申されました。大聖人の尊像としては一番古く、また一番大聖人に生き写しの尊像であったからです。今もなお、当山の大堂に安置されている御尊像がそれであります。

その他にも、関ケ原戦争の絵巻や、紺紙金泥の法華経など、貴重なものが種々ありますが略します。



開山御所持負櫃　その他　霊宝の数々

小室山鐘楼

当山の余録

（古文書中より）

当山の第十一代、三守法眼、日薬上人は、永正十五年に当山の貫主となりました。甲斐の国守である武田信玄公の伯父でしたので、永禄年中には、武田家から山林田地を寄附され、堂塔伽藍を改築して立派な巨刹に致しました。また、信玄公から、公の家人である望月左近等四人の人を遣わされ、この四人の人々は常に山門を守ることを命ぜられて居りました。今の四院家というのが、その名残りです。

徳川時代になってからは、徳川家から御朱印を賜わり、加藤清正をはじめ、其の他の大名達からも黒印を寄進されていますが、殊に天正二十一年には家康公から山内守護の禁制状を、また慶長元年には寺領を賜わりました。更に、三代将軍家光公からも寺領寄附の御朱印を頂戴し、越えて貞享二年には五代将軍綱吉公から、また享保三年には八代将軍吉宗公から、それぞれ御朱印を賜わり、以下、代々の将軍は皆、当山に御朱印を賜わって居ります。これらは何といっても当山が由緒正しい立派な名刹であったからですが、また、享保十九年正月には、更に宝鏡寺宮の御祈願所となり、毒消しの護符を献上して霊験がありましたために、菊の御紋章の緋紋袈裟と立派な綱代の輿を賜わりました。この輿は今も猶当山に保存されて居ります。また、文政四年十月には、伏見宮からの仰せにより、同じく毒消しの護符を献上して効験が顕著でありましたので、御祈願所となり、この時、菊の御紋章の水引幕、提灯、紫衣などを賜わりました。

山梨県南巨摩郡増穂町小室

本山　妙法寺

振替口座東京一一四〇九番

電話（鰍沢）三四番

昭和三十八年五月十日印刷　昭和三十八年五月十二日発行　発行兼編輯人　山梨県南巨摩郡増穂町　田中海珠　印刷所甲府・大宣堂印刷